

平城京から平安京に都が移る前の 10 年間、長岡京が造都されました。あまりに短い期間ゆえに仮の都のまま廃都されたと見なされ、その意義も軽視されてきました。しかし、近年の発掘調査によって、長岡京は平安京に匹敵する規模の立派な都であることが判明したのです。

長 岡京発掘は中山修一氏という在野の研究者による業績です。個人で発掘作業を始められ、大極殿の跡を発見されたのがおよそ 50 年前でした。彼は、当時の国鉄向日町操車場附近の土の色が周囲とは異なり、またじめじめしていることに気付き、そのことで古文献の或る一文が頭に浮かんだのです。その一文とは下記のようなものです。

「長岡京左京三条一坊八、九、十五、十六町、二坊三、四、六町を勅旨所の藍畑、三条一坊十町を近衛府の蓮池にせよ。」……『類聚三代格』に記された延暦十四年一月二十九日付け太政官符

延暦 14 年(795)というのは、都が長岡京から平安京へ移った翌年のことになります。従って、建物などの移転跡を有効利用するために藍畑や蓮池にするよう命じたものと解釈されています。中山氏は、この不思議な一画がもしかすると蓮池の跡かも知れないとひらめいたわけです。

結論を先述すれば、見事な読みでした。平安京の古地図を重ね合わせますと、不思議な一画は平安京の条坊制の一区画とほぼ一致しました。さらに、蓮池の跡と仮定して長岡京市や向日市の地図を重ねたところ、現在の地名と古代の建物名とが一致しそうな例が多数発見されたのです。例えば、荒内(古代の荒れ内裏か新内裏)、神内(神祇館跡)、倉の内(麩くらの院跡)、馬立(馬うまのりょう寮跡)、鞠場まりい、射場がそれです。もし〇丁目×番地のような表示だったら、こうはいきませんね。

平 城京は天武天皇系[壬申の乱の勝者]の王朝であり、長岡京は天智天皇系[同敗者]の王朝が復活したとも言われています。下表は長岡京遷都に至る経緯ですが、藤原氏らの新官人が擁立する天智天皇系が皇位継承において主導権を獲得していったわけです。

年 月 日	出来事	備考
神護景雲 4 年(770)	称徳天皇が死去、道鏡は失脚	天武系が絶える
宝亀元年(770)10 月 1 日	白壁王(天智の孫)が即位＝光仁天皇	天智系の血統が復活
宝亀 3 年(772)	井上皇后と他戸皇太子を幽閉	天武系を排除
天応元年(781)4 月 15 日	山部親王(光仁の子)が即位＝桓武天皇 ※生母は百済渡来系の高野新笠	辛酉革命の年 父母ともに非天武系
延暦元年(782)閏正月	氷上川継の反乱(鎮圧後に流刑)	平城京勢力を排除
延暦 3 年(784)11 月 11 日	長岡京へ遷都 [桓武天皇]	甲子革命の年

尚、桓武天皇の即位は光仁天皇が存命中になされるという異例なものでした。大きな理由は、この年が辛酉年(天命により世の中が革あらたまる年：古代中国の讖緯説しんい)であったからです。これと同様に、長岡京遷都も甲子年に行われました。しかも、11 月 1 日が冬至と重なるという稀に見るケース(甲子年で 11 月 1 日が冬至＝甲子朔旦冬至かつしきくたんとうじとなるのは、何と 4,617 年に一度)でした。桓武が特別な、強い思いを抱いても不思議ではありませんね。桓武は「郊祀こうし」という道教式の儀式(11 月冬至の日に都の南郊で天帝を祀る)を、中国古代の例に習い、延暦 4 年 11 月、日本で初めて河内国交野[長岡京から見て淀川の南側で、渡来系の百済王くだらのこにきし氏の本拠地]で行っています。

廢都の理由は様々に言われました——①藤原種継暗殺事件、②^{さわら}早良親王の怨霊からの脱出、③河川の洪水、④平城京の仏教勢力を更に遠ざける——などなど。③の自然災害を除き平城京旧勢力との主導権争い、とりわけ藤原種継の暗殺事件は重大です。『日本紀略』の中では、「賊に襲い射られ、両箭身を貫きて薨ず」と記され、造都責任者を射殺したのは平城京勢力による陰謀と思われるからです。共謀を疑われた早良親王は、無実を主張して抗議の絶食を敢行され、淡路島流刑への移送途中で亡くなるなど、その真相は不明部分が多いとされています。

年 月 日	出 来 事	備 考
延暦 4 年(785)8 月 24 日	朝原内親王(桓武の皇女)が齋宮として伊勢大神宮へ向かう	桓武は平城京で見送り 以後も平城京に滞在
延暦 4 年(785)8 月 28 日	大伴家持が征東中に病死	平城京勢力の重鎮
延暦 4 年(785)9 月 23 日	藤原種継が暗殺される(死亡は翌日) (夜 10 時頃、2 本の矢が射られた)	桓武天皇が急遽戻り、 犯人・首謀者らを断罪
同年(785)10 月	早良親王(桓武の同母弟)が餓死	安殿の対抗馬を排除
同年(785)11 月	^{あて} 安殿親王(桓武と乙牟漏の子)が立太子	後の平城天皇
延暦 7 年(788)	藤原旅子(桓武の夫人)が死去	早良親王の祟り？
延暦 8 年(789)春	高野新笠(桓武の生母)が死去	
延暦 9 年(790)閏 3 月	藤原乙牟漏(桓武の皇后)が死去	
同年(790)以降	安殿皇太子の重病状態が続く	

松本清張氏の「期待可能性の犯罪」説 (松本清張『名札のない荷物』より)

桓武天皇は皇女の伊勢行きを見送るために、わざわざ平城京へ赴いた。問題はその後である。遷都後の政務(決済案件)が滞ることも顧みず、一カ月間も鷹狩りに興じるなど新都を留守にした。あらゆる困難を排して去ったはずの平城京に留まる理由など見当たらない。まるで何かを待っているかのような態度である。「何か起きるはず……」、桓武は何を期待していたのだろうか？

長岡京への遷都提唱者でもあった藤原種継は、平城京勢力からは強く恨まれている。まさしく攻撃の対象になってもおかしくはない状況にある。桓武が不在中であれば尚更、そうした危険は増すに違いない。大伴氏や佐伯氏らが早良親王を担いで決行に及び、種継が殺られるのであれば言うことはない。仮にその逆であるならば、種継を裁判にかけて有無を言わせず斬刑に処する。どちらにしても、自分が長岡京に居る限り事は起こらないし、自らのアリバイ作りも必要だ。

「桓武が種継を見捨てるのは何故？」と思うのが普通ですが、実は複雑微妙な心理です。即ち、自分の片腕でいるうちは良いのですが、必要以上に実力者になってもらっても困る。もし自分を脅かすような芽であれば、早目に摘んでおこうという判断なのです。恐ろしいものです。

実行犯の^{ほうきのふまる}伯耆椀麻呂と^{めかぎのせきまる}牡鹿木積麻呂、指揮官の^{つぐと}大伴継人と^{ちくら}大伴竹良、及び首謀者と目された大伴家持(この時点では既に故人)、さらには神輿に乗った早良親王など、暗殺事件に直接・間接に関与した罪を着せて、桓武天皇は敵対勢力や不満分子を一掃することができたという次第です。つまり、種継暗殺は仕組まれた事件であり、その意味では真犯人は桓武天皇その人ではないか、松本清張氏の論旨はそういうことです。皆さんはどのように思われますか？

山背国乙訓郡長岡村

平城京から絶縁する狙いが長岡遷都でしたが、この地は水陸両面で交通至便な所です。さらに高野新笠の本拠地[大枝]に近く、成人するまで桓武(山部親王)が育った土地と言える所でした。桓武にとっては故地であり、支持者も多いという読みが働いたと思います。

高野新笠の父方は百済渡来系の^{やまと}和氏、母方は山背地方豪族の^{はじ}土師氏です。これら氏族に加え、秦氏なども強力な支援者となり、桓武政権の中樞プレーンとして重用されることになりました。因みに、亡くなった藤原種継や後任者の藤原小黒麻呂にしても、秦氏とは縁戚関係があります。桓武朝では渡来系の人々の活躍が目立ちますが、平城京とは全く異なる特徴の一つです。

平安京への先駆け

長岡京における政策は平城京からの脱却を図ったもので、非常に大胆な面が見受けられます。長岡京では種継暗殺以降の政争で頓挫したものの、それは平安京へも引き継がれました。

平城京からの寺院の移転を認めず	政治に介入する仏教勢力(七大寺)を遠ざけた 公の寺は東寺・西寺のみ
^{えみし} 蝦夷対策を本格化	反乱の芽を根絶するために大量動員をかけた
渡来系の人々の活用 中小氏族の人々の活用	藤原氏の登用を極力抑える一方、渡来系を重用した 桓武天皇自体の主導力を増す
後宮に渡来人を入れる	皇后以外の妃・夫人・ ^{ひん} 嬪に渡来系を採用した 嵯峨天皇の頃まで続く
賀茂神を祀る	遷都の報告を地元の乙訓社ではなく、賀茂社で行う

「あれっ?」と思われるのは寺院に対する制限策ではないでしょうか。今日の京都は宗教都市と言えるほど仏教各宗派の本山が集積している地です。しかし、長岡京から平安京にかけての頃は官寺(国立の寺)のみが許可され、しかも東西二つだけだったということです。建立された場所は都の最南端で天皇の内裏からも遠く、寺院に対する姿勢がはっきりと出ていますね。

余談ながら、平安京は満を持して遷都したと見られる点があります。それは長岡京造都の際、瓦は難波宮から、建材は平城京から転用、即ちリサイクルが目立つのに対し、平安京に関してはほとんど新材で建造されたという点です。リサイクル自体はそれまでの遷都でも見られたことで驚くには当たらないのですが、桓武は長岡京までの穢れを絶ち切ろうとしたようですね。

万葉集余話

『万葉集』はこの時期に成立しましたが、これは天皇が命じた勅撰和歌集ではなく、あくまで私的に編集されたものです。今なお特定はできませんが、編集の中心人物は大伴家持ではないかと言われています。それというのも、上述の藤原種継暗殺事件に連座したために官位も財産も没収されましたが、この時に家持宅にあった『万葉集』が発見されて、その後に分けになったのではないかという見方もされているわけです。血生臭い政争の中から、後世に残る宝物が生れたというエピソードです。